

### 3つの『デンクメーカー』に見るドイツ音楽史

朝山奈津子

20世紀初頭に刊行が始まったドイツ語圏の3つのデンクメーカー(DDT、DTB、DTOe)は、国家的遺産というテーマに沿って作品を集めた楽譜大系である。本稿では、長らく言語と文化を共有してきた3つの地域が、いかに固有の音楽史を描きうるのか、これら大系自体を音楽史叙述と見なして分析し、音楽史学による国家遺産作りがどのように行われたかを明らかにした。分析対象は主に各巻序文とし、戦前までの刊行分に限定した。

プロイセンのDDTはシュッツ、バッハに関連する中北部の音楽、特に教会や都市の職人制度に育まれる音楽を「遺産」として取り上げる一方、オペラに関しては、イタリアの影響を脱してドイツ固有のものを獲得してゆくという、克服と闘争の歴史を綴った。

バイエルンのDTBはオペラ史について、イタリアから多くの優れた作曲家がドイツ語圏を訪れてそこで改革の意識に目覚め、フランスのリュリ様式の因習を断ち切ってグルックのオペラ改革の素地を築く、という構図を描いた。また、DDTが強く打ち出したバッハ中心史観に対抗するため、パッヘルベルを中心とするニュルンベルクの音楽を特に詳しく取り上げ、チューリンゲン楽派の源流としての「ニュルンベルク楽派」を提唱している。

オーストリアのDTOeは帝都に形成される「ウィーン様式」を柱とする。イタリア北部すら領有する多民族国家の音楽は普遍にして独特であり、他のドイツ諸邦からもウィーン目指して人と様式が集まっては再び広まっていく。こうした史観は、他の2シリーズとは異なるオーストリア固有の帝国主義、およびシリーズの発起人グイド・アドラーの様式史観に支えられた戦略ということができる。

なお本稿では、これまで曖昧な点が多かった3シリーズの成立過程と相関関係についても整理した。